農業の新しい技術

No. 148(平成４年３月)
分類コード　03－09
熊本県農政部

極早生温州の施肥基準の設定

農業研究センター　果樹研究所　病虫化学部

研究のねらい

極早生温州は結実を始めると樹勢が衰弱し、収量、果実の品質が不安定となることから、樹勢を維持しつつ果実の品質向上を目指した施肥体系を確立する必要がある。

このため、極早生温州（肥後早生）園で窒素の施肥量および施肥時期について検討した。

研究の成果

１．窒素の施肥量は若木（収量 2t 弱/10a）を供試したため 10a 当り窒素 0kg、7.5kg、15kg、30kg について検討したが、樹の生育、収量とも窒素 7.5kg および 15kg で優れ 30kg ではやや劣った。果実品質は窒素 30kg でやや劣った他は大差なかった。

２．施肥時期は春肥 55 %、秋肥 45 %を標準区として、夏肥施用区は春肥 45 %、夏肥 15 %秋肥 40 %、秋肥重点区は春肥 40 %、秋肥 60 %について検討した結果、樹の生育、収量、果実品質とも標準区が優れた。

３．試験の中で施肥量を多くしても樹の生育・収量がそれに伴わなかったのは、供試樹が小さく高畦で畦の上だけに施肥したため、1 回当りの施肥量が多すぎ根に障害が発生したものと考えられた。

４．以上のことから、施肥量としては 10a 当り窒素 15kg 程度に適量があるとみられ、施肥時期は春と秋の 2 回施肥が適当であった。

５．施肥基準の設定に当たって、2 回施肥では収量の多い園での春肥 1 回当りの施肥量が多くなることに併せて、極早生温州の根が多肥に弱いことから春肥を 2 回に分施し、肥料障害の発生防止に努めるとともに、春肥の 2 回目の 4 月上旬の施肥は春枝の伸長を促進し樹勢強化を図ることを目指した。

○極早生温州の施肥基準

(1)未結果樹（三要素比共通）

樹齢と施肥量ｇ／本		時　　期	割合%
１年	８０	２月上～３月中旬	４０
２年	１００	５月上～　　中旬	３０
３年	１２０	１０月下旬	３０

注）植栽本数と施肥量制限
100本／10a……100%
180本／10a…… 80%
200本／10a…… 60%

(2)結果樹(三要素比N10、Ｐ$_2$O$_5$７、Ｋ Ｏ７)

①収量予想とＮの施肥量kg／10a

収量予想ｔ	施肥量kg
２	１５
３	１８
４	２２
５以上	２５

時　　期	割合%
2月上旬～3月上旬	３５
４月上旬	２０
10月中旬	４５